

卒園できないお父さんたち～T・C・Cの愉快的地域交流

(水琴社取材)

『新しい土地、新しい町にやってきたわたしたち。見知らぬ者同士が神父、シスター方を中心に人間関係の育成をはかり、温かく、美しく、楽しい心を生み育て、お互いに家庭と、人生をすばらしく、有意義なものにしたい。そのためにT・C・Cはお互いに語り合い、勉強しあい、楽しみ合い、そして助け合える場でありたい。』(T・C・Cの趣旨)

お父さんの会

奈良市登美ヶ丘は、大阪の難波から近鉄奈良線の学園前で下り、そこからバスで十分のところにある。大阪と奈良のベッドタウンとして開発された新興住宅地で、すでに二十年以上を経ている。丘陵に沿った家々は、しっかりと落ち着いたたたずまいをみせ、恵まれた自然にとけ込むように美しい調和を見せている。

この丘陵のいちばん高い位置に登美が丘カトリック教会の十字架の塔がそびえ、併設されて登美が丘カトリック幼稚園がある。ふだんは子供たちの元気な声をはねかえっているのだが、土曜日、日曜日ともなればテニスコートから大人たちの歓声が響く。わが子たちはとうに卒園し、もう結婚し、やがて孫ができようというのに、親たちはいまだに卒園できず、幼稚園に通い続けているのである。

どの地域でもPTAといえは母親の管轄と決まっているが、ここ登美が丘カトリック幼稚園は全国でも珍しいお父さんだけの会が生きている。「国際的な視野に立てる子供を育てる」という園長のグリーン神父の方針から、園児に英語を親しませる工夫もなされるかたわら、「父親参加の幼児教育」が親ぐるみの教育として実践されている。日常的な運営はお母さんたちの自主的な役員構成で成る「いずみの会」が運営している。

入園希望者は信者ばかりと思いきや、なんと信者はたったの数パーセント。ほとんどの家庭がはじめてキリスト教に出会うのである。

入園時、グリーン神父は母親ではなく父親を中、心に面接をする。人生において最も重要な幼児期が、父親不在の教育であってはならないというのが神父の信念である。ここで約束をした父親には「会社が忙しい」は理由にならないのである。

父親にとってもなにもかもが新しい生活のスタートだった。ピカピカの園児たちがペラペラの英語をしゃべりだすと、昔習って忘れた英語では追いつかない。すわ一大事とばかり「神父さん、ぼくにも英語を教えてください」という声がつぎつぎとあがり、ぼくも私もとお父さんたちの英会話教室が始まった。1969年春のことである。これが心の交流の源泉となり、やがて地域コミュニケーション活動の母胎「T・C・C」となるのである。

グリーン会のわんぱく仲間

新興住宅地に住むお父さんには、あいさつのほか近所づきあいはない。会社の休みはゴロ寝かゴルフの素振り、庭で草木の手入れもガラじゃないからと、ゴルフなどに同僚と出掛けてしまうのが通例だ。グリーン神父の協力を得て生まれた英会話教室は、同じ思いのお父さんたちの心をついて大盛況。この大きな園児たちは熱心に勉強しはじめ、気をよくして賢島一泊旅行にまで及んだ。この旅行では日本語使用厳禁、全部英語で話す。罰金制でポリスマン役までつくっての実地旅行は、バスの乗客が海外からの日本人二世とカン違いするほど大成功。お父さんどうしのコミュニケーションがしっかりできた。

英会話から生まれた芽は、やがて「グリーン会」と銘打って、ゴルフ、テニス、ランニング、囲碁、軽音楽、カメラ、釣り、卓球、ボーリング、絵画、小唄、余興と、つぎつぎに交流の輪を広げ、新聞記者が取材に駆けつけたときは、教会ホールの十字架の下で、マージャン部と称する大勢のお父さんたちがジャラジャラやっていたというから驚く。

お父さんたちはいくつもの部をかけもちして楽しんでいる。休日の朝はランニング部のメンバーが丘陵地を走る。グリーン神父が走る。部員が走る。そのうち、教会とも幼稚園とも縁のない近所のお父さんまでがいっしょに走りだし、メンバーに加わって、奈良市民マラソンをめざして走っていたりする。

お父さんたちは一時期「ブラッド・バンク」(血液銀行)なるものもつくった。メンバーや家族の不測の事故に備えようと、年二回の献血で約二万リットルの血液も用意するなど、その活動のエネルギーたるやたいしたものである。

1974年9月、司祭館横にマリスト・テニスコートが完成した。グリーン神父と同郷出身のギーニー神父、ウォルシュ神父対元デビスカップ日本代表河盛氏との模範試合が行われ、賑やかなオープン試合となった。

楽しみは分かちあうという粘神が育まれ、クリスマスパーティでの持ち寄りオークションで得た収益金は全額イタリア地震被災者に送るなど、福祉のための助けあいも忘れない。

T・C・Cの誕生

登美ヶ丘のお父さんたちはいきいきしていた。このような父親の地域活動をマスコミが気付かないわけがない。「明るいコミュニティづくり」(1974.11.9 サンケイ新聞)が掲載されたころ、グリーン神父はお父さんたちが自主運営できる力を信じ、また、自分以外の司祭を後任で迎えることも考え、会名を改めてはどうかという希望があった。

1975年7月、グリーン神父の要望を受け、正式名称『登美ヶ丘カトリッククラブ』通称『T・C・C』が誕生した。拘束するもののない簡単明瞭な会則もつくった。名誉会長にグリーン神父、初代会長に英語部、テニス部の三枝氏が就任した。

ちょうど当時、日本全国の新興住宅地の人々が、地域活性化の知恵を求めていた。登美ヶ丘のお父さんたちの結束した楽しい活動はその良い手本になったのである。「地域交流たのしいヨ」(1981.2.7 朝日新聞)が掲載され、ついにはNHK教育テレビから出演の依頼まで入ってきた。T・C・Cを代表してパートナー役の石山氏が出演し、ランニング部、マージャン部の紹介をする中で、心の交流が地域活性化のいかに重要なカギであるかをさりげなく説いた。

「奈良市民便り」(No.514 1983.6.15)一面に「ごくろうさん、早寝早起き運動」と題してランニング部の活動が写真掲載されたこともある。

わが子はとうに卒園している。わが子がいなくなった幼稚園にお父さんが居残って、つぎに入園してくる園児のお父さんたちを巻き込み、T・C・Cのメンバーは確実に増加していった。お父さん同士が仲良ければ、お母さん同士も仲良しになる。卒園した子供たちにも年齢を越えたタテのつながりができ、安心して付きあえる交友範囲も広がる。おのずと助けあいの精神が育てられるというわけである。

メンバーたちは、この土地に移り住んでほんとうによかったと感じている。会社の付き合いがない本音の付き合いがここにはある。たしかに揃いすぎているぐらい、いろいろな職種の人々が集まっている。勤める会社もさまざまなので、それぞれの技術を提供しあえば地域共同体も完璧になる。医師だけでも内科、外科、小児科、その他全科目の医師が揃っている。銀行、デパートに勤める人、保険会社員、会計士、税理士、建築士、弁護士、裁判官、洋服屋さん、自動車セー

ルスマン、電気メーカー技師、教師、大学教授、その他ありとあらゆる靴紐の人々が住んでいる。

でもここでは勤務先は関係ない。会員名簿にも職業欄はない。仕事抜きの人間交流なのだ。それだけにリラックスでき、喜びも楽しみも、悩みも不幸も分かちあえるわけである。

名物パパカレー

教会にはいろいろな行事があるが、信者であるなしにかかわらず奉仕活動も忘れない。ある高校の先生は、信者でもない。幼稚園とも関係ない。いちおうランニング部のメンバーだが、ひざをいためてからは走ることができず、治療しながら釜ヶ崎の労務者に炊き出しの奉仕活動を自主的にやっているという。

個人で奉仕活動をしている人もいれば、全員で定例の教会行事に汗して奉仕活動もする。そのメイン活動が秋に行われる教会バザーでの「心の市」である。一年間にたまったお中元やお歳暮の品物、不要品を持ちよる。小物、食品、衣服、玩具、ゴルフ道具から健康機器まで中には会社から安く買ったいて持ち込んだ電気製品などもある。これらの品々に安い値段をつけて売るのである。呼びかければどの家庭からも用意された品物が出され、見る見るうちに山と積まれる。

「心の市」の数日前からT・C・Cのお父さんたちは忙しい。呼びかけ、品物の整理、運搬、販売価格の査定、抽選券の売りさばき、会場の設営、客の整理のためのロープも張らねばならない。

当日は朝からたいへんな人が集まる。できるだけ早く行って欲しい品物を手に入れようと、オープン前から長い列ができてしまう。じかに商売をしたことのないお父さんたちが、大声を張り上げて、汗をかきながらの大奮闘をするのである。会場には爆笑が絶えない。

バザーで得た収益金は教会建設に要した借金の返済に充てられたり、教会活動の運営費などに充てられたりした。収益の二割は必ず福祉のために使われる。現在は借金の返済も完了したが、また新たに補修などの資金集めが当然必要になってくるだろう。お父さんたちのがんばりに終わりはないようである。

春には子供まつりが行われる。新入園児の歓迎の意味もあり、新しいお父さんやお母さんたちとT・C・Cとの出会いの場でもある。

いかに楽しんでもらうか、企画から準備、運営からあと始末まですべてT・C・Cのお父さんたちで賄われ、お母さんたちにもサービスする。

ジャンケン大会、もちつき大会、フォークダンス・・・、子供が喜ぶ景品もひとつひとつ選ばねばならない。考えられるかぎり子供の視点で考える。

一方、出店準備も大きな仕事である。タコ焼き、綿菓子、みたらし団子、パパカレー。

簡単そうに見えるものばかりだが、ものごとを甘く考えてはいけない。マージャンパイしか知らないお父さんたちなのである。いちどにどっとたかってくる大勢の子供たちに、どうしてまともな丸いタコ焼きを作ってやれようか・・・。業務用の立派なタコ焼き道具を買ったものの、実際には慣れるまでに何年の経験を要したことが。

わた菓子の器械も、思い切って買い込んだ。器械を使って雲みたいな大きな砂糖菓子ができるというのは、子供たちの目には魔術めいて不思議だろう。人気があるが、これもふんわりと、形よく割り箸にからめるのは要領がいるのである。わた菓子は英語部が担当しているが、今ではほかの教会の祭りにも、頼まれると器械を貸し出している。

みたらし団子はゴルフ部が担当した。

ピンクのエプロンをつけたお父さんたちの姿を園児たちはあらためて見直す。

「なんや、へたくそやなあ」

と言いつつ、子供たちはうれしくて仕方がないのである。お父さんはただ奮戦するのみ。

登美ヶ丘の「子供まつり」の名物はパパカレーだ。英語部、ゴルフ部、ランニング部、壮年会と順次担当を変えて引き継がれている。材料の買い出し、調理など、パパカレーは前日が勝負であるが、お父さんたちにとってもこれほど楽しい時間はないのである。教会のキッチンには笑い声が絶えない。

このパパカレー、玉ねぎやにんじん、じゃがいもなどの具が煮えたからと、ルーをほうり込むようなものではない。鶏がらでじっくりだしをとったスープをつくり、その中に「具が大きい」と言われながら炒めた材料を入れ、ぐつぐつ煮る。仕上がりを待ちつつ飲む。しゃべりながら飲む。飲みながら待つ。カレーを入れて高級ワインを加え、味を整えるという凝りようなのである。

「単身赴任になってもね、おかげでカレーだけはできるんだ」と言うお父さん。

皿やスプーンをきれいに洗って準備をし、翌日のカレー専門店になる部屋に机やいすを配置して終わる。翌朝はカレーを温め、ご飯を炊いて出来上がり。

いまやパパカレーは登美ヶ丘の味である。

T・C・Cの今後の課題

T・C・Cメンバーのほとんどはカトリック信者ではない。しかしここまでグリーン神父の教えが生かされれば、潜在的な信者ともいえるのではないだろうか。

「T・C・Cがここまで発展したのは、ひとえにグリーン神父様のお人柄です。さらに加えていえば、グリーン神父様の帰豪中にも面倒を見てくださったマリスト会の神父様のサポートと、信者でもない者がわがもの顔に出入りするのを許して下さるシスター方の理解、そしてT・C・Cの一年交替で成る役員たちの努力。この四つがいきいきした活動の条件になっていると思いますよ」とは初代会長の三枝氏のことばだ。

いま、お父さんたちは地域で何をしたいかを考えている。これからは会社で何がしたいかというより、生活の場で何ができるか、何がしたいかを問われる時代だとグリーン神父は言われる。

高齢化は確実に進み、自分の体は自分が面倒を見てやらねばならない時代になった。地域ぐるみで助けあうことの大切さに、いまお父さんたちは直面している。

T・C・Cの基礎づくりができ、若いお父さんたちに引き継いでもらうこと、また新たに何ができるのかを考え、次の基礎づくりも考えなければと思っている。

わら半紙にガリ版印刷をしたグリーン会の『会報』は、すっかり変色して、過ぎ去った年月を感じさせる。黄色くなったわら半紙とワープロ仕上げの白い印字用紙の『T・C・C便り』の間に、お父さんたちが楽しみながら費やした、愉快的仲間づくり、地域活性化づくりの時間と世の中の大きな変化を見ることができる。

職場では通訳なしで商談できるようになったお父さん。まもなく娘が結婚するというお父さん。定年退職を気にしながら、まだまだこれからだよと意気まいてお父さん。ジェネレーションの差だね、OB会をつくろうよと呼びかけるお父さん。

ありがとう、お父さんたち！

これからも頑張って、T・C・C！

グリーン神父が笑って言われた。

「T・C・Cのお父さんたちは博士課程です。そろそろ卒園証書を出しましょう」